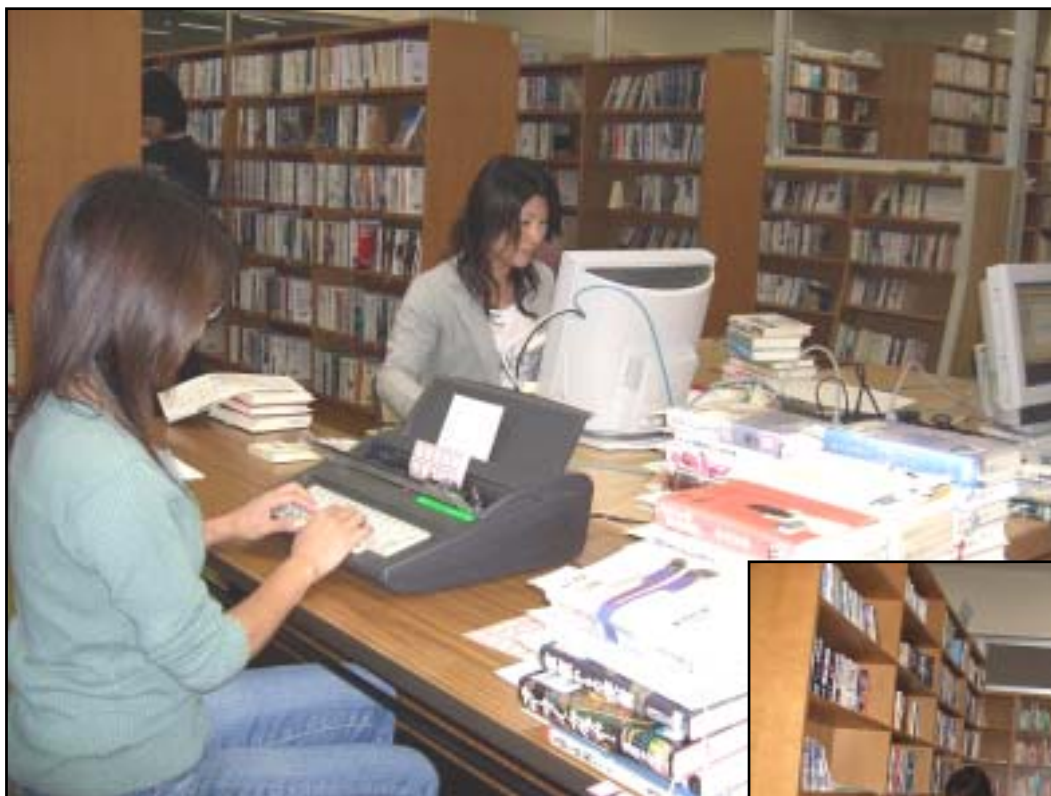


図書館だより 第23号



(大山図書館のシステム統合作業の様子)

大山図書館は10月末まで休館、11月1日から開館します。



<システム統合の今後の予定>

- * 婦中図書館 (臨時休館 11/14~12/12 新規開館 12/13)
- * 山田図書館 (平成 19 年 1 月初旬予定)
- * 細入図書館 (平成 19 年 2 月予定)
- * 大沢野図書館、八尾図書館 (平成 19 年度予定)

目 次

特集 平成 18 年度 富山市立図書館協議会 質疑応答	2
いちおしライブラリー 第 11 回 「ワインと楽しもう」	4
展示紹介 韓国の絵本展、岩倉政治・寄贈資料のエピソード	6
山田孝雄文庫の資料 23 「岩波文庫版『平家物語』原稿」	7
レファレンスあれこれ	8

平成18年度 富山市立図書館協議会 質疑応答

図書館協議会とは

富山市立図書館条例に基づき、図書館運営に関し、館長の諮問に応じたり、図書館奉仕について館長に意見を述べるため、「図書館協議会」が設置されています。

(根拠法令は図書館法 16 条による)

富山市立図書館協議会は、各委員の任期を 2 年とし、本館から選出された 7 名、各地域館から選出された 6 名、公募により選出された 2 名の計 15 名の委員で組織されています。

先月 9 月 8 日に市立図書館本館 7 階の特別室において、平成 18 年度富山市立図書館協議会が開催され、図書館職員と協議会委員 11 名(欠席 4 名)によって、図書館運営についての説明や質疑応答が行われました。

<平成17年度事業に関する質疑>

(質問)

「地区別登録者」を見ると、登録率が地域によって大きな差があるが、どうしてか。

(回答)

登録率は、市民が図書館施設を利用する際の距離、交通、時間などによって反映されるものです。大沢野地域と八尾地域で 60% を超える登録率となっていますが、八尾地域の場合には比較的狭い地域に人口が密集しており、かつその中に八尾ほんの森図書館、八尾東町分館、八尾福島分館の 3 つの図書館があるため登録率が極めて高くなったものと思われます。

また、大沢野地域では幹線道路の国道 41 号線を中心に道路交通網の要衝に設置されていることが高い登録率となっていると考えています。

昭和 47 年に文部省の委嘱を受けて調査研究を行なった、旧富山市の「図書館サービス網整備計画」では、登録率の目標値を 20% に置いていましたが、計画に基づき図書館施設の整備を図ったことから、現在は 35.4% となっています。

今年度から始まる、コンピュータシステムの統合が進めば、地域的な登録率にも多少変化が生じるのではないかと考えております。

(提言)

本館・地域館・分館等 25 館もある図書館を、82 名の少ないスタッフでよく運営していると思

う。「図書館だより・22 号」には中核市との比較が載っていたが、中核市の人口に対する図書館員の比率も掲載すべきではないか。

人的体制の低下は、サービスの低下にもつながると思われるので、全国的な数値を別の機会に教えて欲しい。

(回答)

職員の対人口比については、図書館だよりへの掲載を検討します。

<平成18年度主要事業に関する質疑>

(質問)

山田図書館の建設費は小・中学校建設費の中に入っているのか。

(回答)

山田図書館の建設費は学校の建設費の中に含まれています。図書館の予算では主として図書購入費を計上しています。

(質問)

山田図書館について学校図書館との連携は、スムーズになるのか。すでに岩瀬小学校の中に学校図書館と統合されて岩瀬分館があるというが、そこではうまくいっているのか。

岩瀬の場合には学校と地区センターが接しており、地区センター部分に図書館があるのであり、山田の場合には学校内に公共図書館が入る形だが、一般の住民には学校内に入りにくいという面があるのではないか。

(回答)

今のところ、岩瀬分館においては、すべてが理想どおりになっているというわけではありません。まだ、学校側に遠慮が見られ、上手に図書館を利用していない面がみられます。今後は具体的な図書館活動を通してより統合のメリットが発揮されたいと考えています。

山田図書館の場合には、17 年度に嘱託司書を配置し、ホームページを活用しながら地域に密着したサービスを展開してきました。その結果、利用者数、貸出冊数、予約件数、レファレンス件数など驚異的な伸びを示しております。学校図書館と公共図書館の統合ということで、設計上の工夫や安全管理も配慮されておりますので、現在のサービスをより拡充できるものと考えております。

(提言)

コンピュータ関係では、本年度はシステムの統

合化が主な事業だと思うが、富山県立図書館とか石川県立図書館のように、インターネット上に貴重書や地図などのデジタルコンテンツを公開し、地図や貴重な文献の画像を、住民が自宅で、直接、閲覧できるようなサービスを展開すべきではないか。

(回答)

現在富山市立図書館のホームページでも富山市の地籍図と売薬上袋(薬のパッケージ)の画像を公開しています。また、八尾地域の3館では八尾の伝統文化に関する画像を閲覧可能にしています。山田孝雄文庫に所蔵する古典籍や富山市各地域の伝統文化などの画像をデジタル化し公開することを、富山市総合計画にも目標として文言を掲載することができるのではないかと考えているところです。

<図書館サービスの今日的課題について>

(質問)

『これからの図書館像』に掲げられている項目のうち、多くのことがすでに本館において実現ないし実現に向けて努力しているとのことで心強く思った。

「図書館だより」の「レファレンスあれこれ」の欄は、図書館職員が住民の求めている情報を提供しようと真剣に取り組んでいる姿勢がうかがわれ嬉しい。レファレンスサービスが一市民の問題解決支援する、優れたサービスだと思っている

ところで、昨年の高林和子さんの『シルクロード展』は、図書館の企画としてはユニークである。図書以外の岩石や民族衣装など 2,000 点近い様々な資料が、博物館でなく、一括して図書館に収集されたことは、大変嬉しくすばらしいことである。ついては、次の2点について尋ねたい。

半生をかけて収集した図書などの文献を図書館に寄贈したいという話を聞くが、個人の旧蔵書の寄贈受入について、本館では特別な条件等があるか。

また、文芸創作活動をしている人達が、市町村の図書館へ著作を寄贈しても、本館では受入し書架に展示してもらえるのに、他の市町村の図書館では展示してもらえないことがあるのはどうしてか。

(回答1)

『図書館事業実施概要』の43頁に当館の資料収集要綱を掲載しています。その第11条に郷土資料及びそれに準ずる資料について、重点的に収

集することを表明しています。富山県出身者の著作物は積極的に収集を行なっています。

個人の旧蔵書の寄贈申し込みについては、原則として、所蔵者のお宅にうかがい資料を確認し受入するかどうかを判断しています。

(回答2)

郷土資料及びそれに準ずる資料については、日々新聞などをチェックし、著作が刊行されればその記事をコピーし、ファイルを作成しています。そして、入手方法など発行者に問い合わせ収集に努めています。

高林和子氏のコレクションについては、図書資料は図書館で、博物資料は博物館などとそれぞれ分割して受入することが望ましいと考えています。しかし、高林氏の希望は、すべての資料を一括して収蔵保管されることを希望されていることから、受け手が無かったようです。そこで、一括受入する施設が現れるまでは、当館が寄託という形でお預かりすることにしました。

<その他全体に関する質疑応答>

(質問)

図書館の職員募集について、任期付職員と書いてあったが、レファレンスを行う上でも他のサービスを行う場合でも、任期付職員の採用では今後影響が出てこないか。

自分もボランティア活動を通して図書館に携わっているが、図書館職員の仕事においては、経験の積み重ねが必要であり、人的資源という観点から、長期的な人材の確保が必要ではないか。

(回答)

現在の職員には図書館開設に合わせて昭和44年度45年度に採用された職員が多く、平成19年度、20年度と大量の職員が退職する予定であります。そのことから、分館窓口の業務委託化も計画されており、現時点で職員の定数を確定することが適切でないと考え一時的な措置として、任期付職員の募集になったものです。図書館サービスを進めていく中で、人材の確保と育成は最重点課題と認識しており、長期的な展望を持ちつつ取り組んでいきたいと思っています。

(質問)

とやま市民交流館の図書サービスコーナーについて、今年度に面積も222㎡に増えたというが、ビジネスマンから開館について何か要望が出ているか。また、利用率は増えたか。また夜9時まで開いているが、夜間の利用はどうか。

(回答)

本館のサービスを特化した形での、ビジネス支援サービスが功を奏し、非常に利用が高く、費用対効果に見合う実績を上げています。

利用者用インターネット端末の利用は元より、公共交通の要衝にあることからインターネット予約の受け取り窓口としても大いに利用されています。

また、県内のビジネス関係の新聞記事をファ

イルし提供することで、県外からのビジネスマンにも情報を提供しています。県外のビジネスマンがそれらの新聞記事からビジネスチャンスをつかむことができれば、県内企業にとってもビジネスチャンスになるわけで、地域活性化への支援サービスという狙いも果たしていると考えています。

詳細はホームページに掲載してあります。



いちおしライブラリー 第11回

ワインと楽しもう

一本のワインのボトルの中には、全ての書物にある以上の哲学が存在する

(パストゥール)

ルイ・パストゥールは、19世紀のフランスの偉大な生化学者でワイン醗酵時の腐敗の現象を研究した人です。

ボジョレヌーボーが、毎年11月の第3木曜日の0時に解禁。フランスのブルゴーニュ地方ボジョレー地区でその年収穫されたぶどうで作られ、もっとも早く出荷されるワインです。ブルゴーニュ地方とはどんなところでしょうか。

ワインと歴史



『ブルゴーニュ ワインとグルメと歴史』

遠山敏之 文

日経BP社 2002

ブルゴーニュ地方は、フランスのディジョンからリヨンに至るまでの南北約250Kmにわたる地域です。その中心都市ディジョンの発展の歴史は中世に始まり、十五世紀に栄華を誇ったブルゴーニュ大公国は当時のフランス王国を凌ぐほど権勢を誇っていました。

ブルゴーニュの中でも最も知られたヴォーヌ・ロマネ村には、日本だけでなく世界中から観光客がやってきます。ワイン生産者たちが、一度は、ここに畑を持ってみたいと思っている赤ワインの

聖地でもあります。

ブルゴーニュワインは、味わいの力強さや香りの豊かさが格別なことからよく「ワインの王様」と例えられますが、ワインだけでなく、世界中のグルメを引き付ける「食の宝庫」です。

奥深い歴史と大公国時代に培った独自の文化、有名なレストランやホテルなどもあり、魅力的な場所として紹介されています。

日本のワインと歴史

『ワインの常識』(岩波新書) 稲垣真美 著
1996



ヨーロッパ各地を回り、これまでにテイストしたワインは数千種類に上るといって著者が、ワインについてわかりやすく解説した本です。

日本でのワインの歴史に触れ、「慶応三年、第一回パリ万博に随行した田辺太一は、ワインに魅せられ、帰国後、明治維新下の横浜で輸入商を始めました。ボルドー直輸入のワインがそこに並び、戦前の日本における舶来のワインといえばボルドーものという伝統が始まりました。

しかし、特定銘柄だけを優先して輸入紹介したため、ワインは高く飲めないもの買えないものという先入観が一般の日本人に植え付けられたのです」というのが著者の見解。

また、明治十年代には山梨をはじめ日本全国で

ワインが作られました、失敗に終わった経緯や著者流ワインの楽しみ方、本場でのワインの常識などが紹介されています。

ワインと作家



『ロマネ・コンティ・一九三五
開高健・六つの短編小説』
開高健 著 文藝春秋 1978

高層ビルの料理店で、40歳の重役と41歳の小説家がテーブルをはさんで座っていました。テーブルの上には二本の酒瓶があり、室内には誰もいません。二人でフランスのブルゴーニュの隣どおしの畑でとれたラ・ターシュの一九六六年とロマネ・コンティ・一九三五年のワインの飲み比べが始まりました。

最初は、重役が若い酒を口の中で静かに噛み締めながら、旅行でのロマネ・コンティの酒倉や畑の話を始め、小説家も口を含みながら、若いのが成熟して良い酒だと納得。次は期待のロマネ・コンティを飲み出しますが…。飲み終わるまでの二人の会話と様子が淡々と描かれています。

他に短編が5編。

* 『いとしのブリジッド・ポルドー』

井上ひさし 著
講談社 1978

テレビ局のデレクター・大泉は、担当番組「珍・日本奇行」の次の企画が浮かばず困っていました。苦肉の策で、古書店を経営する友人の山田が地方へ古書を買いにいく様子を番組にしようしますが、地方には古書がもう残っていないという理由で、断られてしまいます。ところが、入局したばかりの朝子が実家には古書が埋もれていると…。

東北の旧家に出向いた大泉と山田は、そこで古書のみならず、世にも稀なる逸品、1934年のポルドー酒の赤を見つけてしまいます。

他にも、ユーモラスな短編が5編。

ワインと愛好家たち

『夢ワイン』江川卓 著
講談社 1997



野球解説の江川卓氏が日本ソムリエ協会からワインの普及や文化の発展に対して功績のあった人に与えられる称号「ソムリエ・ドヌール(名誉ソムリエ)」を頂戴。元野球選手がなぜ、と訝る向きには本を読んで下さい、と話が始まり、ワインとの出会いや著者の白ワイン遍歴などが書かれています。

味覚は人それぞれで、一つとして同じ味が存在しないのがワインの魅力であることを多くの大人に知って欲しい、とのこと。

江川のワインに対する蘊蓄が満載。

次に、江川が伝授した二人の話として

『アガワとダンの幸せになるためのワイン修業 ゴージャスワイン編』檀ふみ、阿川佐和子著
幻冬舎 2005



阿川と檀がソムリエ8人と雑誌で対談したものを本にしたものです。

阿川の好きなワインはブルゴーニュ、檀はポルドー。高級ワインを飲みながらの修業には、江川も講師として登場します。

赤ワインが大好きな二人に白ワインのおいしさもわかってもらおうと、6本のワインを持参し、「人生の最後に飲むワインは、最初に飲んだワインになるだろうな。最後に飲めば、経験を財産として味わうことになる」と、江川。「江川さんのお話はわかりやすく、少し前まではドシロウトだったからこそ、誰よりも温かく受け入れ、教えてくれるのだ…」と、阿川と檀。

さて、二人には修業の成果があったのでしょうか。

この他に『アガワとダンの幸せになるためのワイン修業 カジュアルワイン編』もあります。

(大広田分館 滝川)

展示会のお知らせ



「韓国の絵本展」

会期：平成18年10月27日(金)～
11月9日(木)
午前9時30分～午後5時
会場：富山市立図書館 本館 特別室(7階)

ドラマ、映画の韓流ブームや、環日本海の経済交流や観光客の増加など、ますます身近になったお隣の国「韓国」。

近年、韓国では、子どもへの読書普及運動が盛んで、質の高い優れた絵本が出版されており、日本でも韓国の翻訳絵本の出版が増加しています。

韓国の民話は、日本とよく似た物語もありますが、トッケビやヘチといった想像上の動物やトラが登場するのが特徴的です。創作絵本では人々の暮らしを描いたものが多く、伝統的な風習を知ることができます。

読書週間期間中、韓国絵本の原書をはじめ翻訳絵本や日本の作家が描く韓国民話の絵本を展示します。今、アジアで最も勢いのある韓国絵本の世界をお楽しみください。

(本館青少年図書室 瀬口)

岩倉政治・寄贈資料のエピソード

富山市立図書館は、平成15年、作家である故・岩倉政治氏(明治36年～平成12年)の遺族より、同氏の旧蔵書および遺品の寄贈を受けました。その内訳は、岩倉氏の著作を含む図書約1,500冊、雑誌約400冊、その他に手書きの生原稿、執筆のための各種資料類を集めた封筒・ファイル、生前に愛用された文房具等の遺品があり、合計点数は、約2,000点にのぼります。

岩倉氏は明治36年、東砺波郡高瀬村(現南砺市高瀬)に生まれ、大谷大学哲学科在籍時には、鈴木大拙・戸坂潤といった、気鋭の宗教家・哲学者の薫陶を受け、仏教や唯物論哲学への関心を深められました。

昭和14年、小説『稲熱病(いもち)』が芥川賞候補となり、注目をあび、以後、「中央公論」「文学界」「新潮」等に、多くの作品を発表されました。

戦後は富山市に居を移し、教科書にも採用された、児童文学の代表作『空気がなくなる日』や、自作『無告の記』を発表するなど、平成12年に亡

くなるまで、精力的な執筆活動を続けられました。

寄贈された岩倉氏の著作は、図書の初版本や、その後単行本に収録されず、現在では読むことの難くなった作品が、雑誌掲載時のまま、多く保管されており、氏の文筆活動を知るうえで、きわめて重要な資料といえます。また、幾度にもわたる推敲のあとから、創作の苦闘ぶりを伝える『無告の記』の生原稿、膨大な量の封筒やファイルに集められた、切り抜きやメモなどの資料類からは、執筆にかける岩倉氏の執念、生半可な姿勢を拒む作家としての矜持が窺えます。その他の蔵書も、青年期に傾倒した、唯物論やマルクス主義思想関連の専門書から、近年のベストセラーにまでおよび、晩年に到るまで、その広範な知的好奇心が、決して衰えなかったことを示しています。

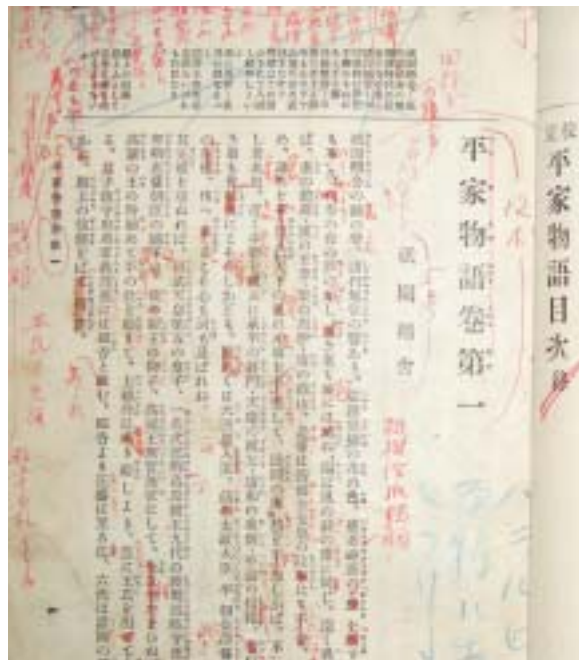
現在これらを、「岩倉政治文庫」として公開するため、整理をすすめているところです。富山県を代表する作家である、岩倉氏の足跡をたどるうえで、またとない研究資料となることと思います。

(本館一般図書室 舟山)

山田孝雄文庫の資料 23 岩波文庫版『平家物語』原稿



(岩波文庫『平家物語』昭和4年版)



(宝文館『校定平家物語』、岩波文庫の原稿)

『岩波書店八十年』によれば、岩波文庫に初めて『平家物語』が登場したのは昭和4年(1929年)3月のことである。以来70年、平成11年(1999年)7月に梶原正昭、山下宏明校注による岩波文庫版平家が出るまで、山田孝雄の岩波文庫が基本テキストとして、また手軽に読める平家物語の活字本として、印刷され読み継がれてきたことになる。

その岩波文庫版のもとになったものがこれである。素材として用いられたのは山田、高木による『校定平家物語』の後刷りであろうか。というのは、山田孝雄文庫に大正4年の初版本があるが、大きさも初版の方が22.8×15.6cmと大きく、印刷もすっきりとしており、一方この書入本は紙質もやや劣り、印刷も不鮮明だからである。

その本に、朱細筆、赤ペン、青ペン青鉛筆で全頁のほとんどの行に書入れがほどこしてある。

たとえば各巻各章題目でも宝文館版で「清盛出家」だったのを、文庫版では「禿髪」同じく「義王義女」を「祇王」などと改めている。

『校定平家物語』山田孝雄校定 高木武校定
東京宝文館 大正4年(1915)刊
22.3×15.4cm 目次14, 本文502頁

東京宝文館版校定平家物語の目次と本文だけを製本し直し、その本にじかに山田孝雄が書入れたもの。

また本文では漢字表記のほとんどに振り仮名をつけ、その付けかたも宝文館版から大分変更されている。この傍訓により、およその意味が理解できると、当時の読み方がわかり、研究テキストとしても、初学者のテキストとしても重宝する。

おそらく大正4年(1915年)に宝文館版を刊行してから昭和3年(1928年)ころまでの十数年の間も研究を進め、その成果を岩波文庫版に投入したものであろう。

その結果、この「校定平家物語書入本」は目次・本文全516頁が、書入れて真っ赤になっている。

(本館 亀沢)

レファレンス あれこれ

芸術の秋、スポーツの秋、食欲の秋・・・。
今回は、県外から転入して新しく利用者になられた方からよく聞かれる、郷土の食べ物に関する質問を紹介します。

Q．富山の名産として有名な「鱒のすし」の歴史や由来、作り方を知りたい。

A．富山のことを調べるときはまず『富山県大百科事典』（北日本新聞社 1988）である。「鱒のすし」の項目には、作り方と歴史・由来の簡単な記述がある。『とやまの特産物』（富山県食品研究所 2003）『ふるさとの味と技』（富山県貿易物産振興会 1985）には簡単な歴史や由来が紹介されている。

今から 200 年ほど前の享保 2 年（1717）、三代藩主前田利興の家臣吉村新八が神通川で獲れるマス（鮎という説もある）と上質な越中米を用いてますずしを作り、将軍吉宗に献上したのが始まりとされる。

次に、何か写真とともに紹介してあるものがないかと探してみた。すると、『味のふるさと 14 富山の味』の「マスすし」ページに、詳しい作り方が写真とともにわかりやすく載っていた。

また、富山県に関する事項について特集して出版されている『富山写真語 万華鏡 6』は「鱒のすし」である。これには、すしの歴史や由来、駅弁としての「鱒のすし」について詳しい記述があり、もちろん作り方についても写真はついていないが詳しく書いてある。『日本の郷土料理 6 北陸』（ぎょうせい 1986）には、「鱒鮓」として見開き 2 ページに歴史や由来、作り方が写真とともに紹介してある。これらの他、ガイドブックなどにも簡単な記述を見ることができる。



（鱒のすし）

Q．駅前の居酒屋で「オキノジョロウ」というお品書きをみたが、どのような魚か知りたい。

A．『富山県大百科事典』で「オキノジョロウ」を調べると「ヒメジ」を見よとなっている。「ヒメジ」の項目にスズキ目ヒメジ科の魚で、県内では「オキノジョロウ（沖の女郎）」と呼ばれ雌魚扱いだが、沖縄では漁獲量も多く美味な魚として珍重されているとある。白黒だが魚の図も載っている。

次に、『とやまの魚』（富山県水産試験場 1991）や『原色日本海魚類図鑑』（桂書房 1990）には、カラー写真とともに詳しい魚の紹介があり、富山では味噌田楽などにして賞味するとある。

また、方言研究でも知られている箕島良二さんの『魚ごころ人ごころ』（北日本新聞社 1994）には、「ひめじ（比売知）」として紹介してある。ヒメジ科で和名ヒメジ。今ではほとんど使われないが、由緒ある寺や格式ある家柄の娘をジョロハンと呼んできた。語源は「上臈さん」むかしは官位・職名でもあったが、一般には身分の高い婦人、貴婦人という意味である。昔、新湊海老江の村人たちは、ヒメジを「沖のじよろはん」と呼んでいたそうである。和名「ひめじ」は姫魚の意味と考えられ、この魚に対するイメージは「可愛い少女」というのが共通の見方らしい。

（本館参考図書室 北山）



（オキノジョロウ）

平成 18 年 10 月 20 日富山市立図書館 編集・発行 富山市丸の内 1 丁目 4 - 50 TEL 076-432-7272
HP アドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp> E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp